

With M & M

今江町 松倉博祥

(一)

松田雅彦は、就職して二年目のある日、同期の東山稔から深刻な相談を受けた。

金の卵と言われた集団就職の少女を孕ませ、マジに結婚したいと言っているのである。

雅彦は「これからの人生が閉じられる」と分別臭いことを言っ
て反対した。それを聞き入れた東山は、ほどなく彼女と別れた。
雅彦自身は、恋に不器用で、何も起こらず、起こしもしなかつ
た。だから、皆から聖人君子とか、人畜無害とまで言われていた。
そしてある時、笑うと右頬に片えくぼができる子に出会って、
心が躍った。どこかで見た覚えのある顔に、たちまち夢中になつ
た。

その子も、青森から来た金の卵であった。

二人が付き合つて半年、誰もが認める恋人同士となり、遂に一
線を越えてしまった。

そんな時、皮肉にも雅彦は、突然大阪への転勤命令を受けるこ

とになる。

転勤を断るなら、会社を辞めるしか選択肢はなく、雅彦は恋を
諦めることにした。

それは純粹無垢な十八の少女を、捨てることでもあったが、当
時は遠距離恋愛など考えも及ばず、そうするしかなかった。

「終わりにしよう」と言うと、彼女は泣くだけ泣いたあと、悲
しい笑顔を見せて頷いた。

雅彦は、事なきを得たと安堵しながらも、自分の冷たい本性を
垣間見ていた。

大阪で二年、仕事一筋の雅彦に、直属の上司から得意先の娘と
の縁談が持ち込まれた。

相手の前川道子は、美人で頭がよく、愛嬌もあり、断る口実は
なかった。相手の親から非に与えられ、雅彦は結婚を決めた。

その報告をした時、東山は婿入りして三年も経ち、矢野姓を名
乗っていた。

「そう、結婚するか！ やっぱ、大卒の女を捕まえたか！」と
矢野の祝福には棘があった。

「俺は、三年経っても、子供を持ってないでいる。これって、あの時の罰か？」と泣き言を言った後、衝撃の事実を告げた。

「光子が妊娠していたこと、知らないだろ！」

「おい、もしかして俺の子だ？」

「勿論、お前の子だ。でも流産しちゃった。

ほっとした？ お前ってそんな奴なんだな」

痛い所を突かれて、返す言葉もなかった。

「お前にポイされた光子は、青森に帰ってから妊娠に気付いた。

すぐ小松に戻ったが、追い詰められて、自殺を図った。幸いにし

て一命を取り止めたが、流産してしまった。

お前としては、これで良かったのさろ？」

それつが回らない程、矢野は酔っていた。

話も中途半端で、後腐れもあったが、ふたりはそのまま別れる

ことになった。

半年後、雅彦は、大阪で結婚式を挙げた。

だが母親は、都会生まれの嫁というだけで意固地に反対した。

嫁姑の確執は深刻で、最後までお互いを相容れなかった。その上、

転勤族だったから、両親との同居もままならず、親子の関係も疎

遠のままであった。

道子は結婚して直ぐ子供を産み、育児に専念、評判の教育ママ

となったが、サラリーマンの賢婦人として働く出番は全く無かつ

た。

ネガティブな謹厳実直を通した雅彦は、出世コースに乗り損ね

たまま、五十になった。

ある日曜日、小松からの中継だというNHKの「のど自慢」を

見ている、驚かされた。

歌っていたのは、何と、あの村野光子だ。

あの可憐だった少女が、綺麗には違いないが、貫禄のある中年女性に変貌していた。

番組が終わるや妻の道子は、寛ぐ雅彦を、ひよいと跨いで通り

過ぎていった。

「光子といい道子といい、所詮、女なんて成長もなく変わって、

唯老いていくだけだ」

雅彦は、何処かに忘れ物でもしたような苛立ちのまま、昼間か

ら缶ビールをあおった。

数年過ぎて、矢野と再び会った。

共に勤続三十年を超えた二人は、これまでのあれこれを懐かし

んだ。二人が触れずに終われないのは村野光子のことである。

「彼女は水商売を転々としたが、三十過ぎて九谷焼き作家の薬

師冬樹に見染められた。

その薬師は、名声や財産そして妻子まで捨てて、光子と二人、

大杉の山に籠った。

「略奪愛だ！ 悪女だ」と酷い醜聞が飛んだ。

だが起死回生の薬師冬樹は、光子に喫茶&陶芸の店を持たせ、

工房まで持えた。店の評判がよく、県外から足を運ぶ客もいると

か」

「そう言えば、のど自慢に出てた彼女は、しっかりと、堂々た

るママさんぶりだった」

「だが俺のことは、過去を知る証人だと警戒してか、他人行儀

で全く愛想がないんだ。

それでも、今からその店に行こうと思うが、どうだ？ お前は、

絶対、乗ってこないだろう！」矢野は、決めつけた言い方をした。

「残念ながらそんな気は全く無い。今更、彼女に会わず顔もな

いし、本当は怖いんだ」

「中卒だから」と泣く光子が惨めだった。

あの時、打算で仕事を選び、恋を捨てた。

思い出す度、その罪悪感に苛まれた。

「そうだろうよ。だが、今や彼女は、れっきとした陶芸作家のご夫人に納まつてる。

不倫の果てだが、しつかと幸福を掴んだ今、彼女には、過去の恨みなんか微塵もない。

しつかと、別の人生を歩いている。」

雅彦は、真顔で論ず矢野に頭が下がった。

それでも、矢野の捨て台詞が胸に刺さる。

「お前って、本当の恋をできない奴だ」

(二)

田原省吾と流音の親子は、久しぶりに帰省して、祖母と水入らずの時を過ごしていた。

祖母が開いたアルバムには、写真がない。

展覧会や音楽、芝居の鑑賞チケットを貼りつけたものだが、レタリングやイラストが満載の、実に面白い記憶帖であった。

祖母は、ミロのビーナスやダリ、ツタンカーメン展等、贅沢な展覧会巡りの話をした。

そしてアダモやポール・モーリア、ビートルズ更には演劇や映画などの「青春アラカルト」を思い出しながら、話を続けてくれた。

「M・M」のサインのあるチケットの中で、

「with M・M」と書いてあるのはシャガール展の一枚だけで、しかも筆跡は万年筆である。何故かそれが気になった流音は、スマホで撮って、栞を作ってみようと考えた。

「このM・Mって、婆々ちゃんの恋人？」

「そんなひとじゃないわ。でも、アルバムを見たら誤解するわね。ほかのお友達と一緒にしたこともあるのに。省吾が、どれもこれもサインペンでM・Mって書いてしまったの」

「確か小学校五年の頃、面白がつてM・Mって書いた覚えがある。すごく怒られたっけ」

「まあ、お父様が！ 道理で、下手っぴーだ」

「多趣味で物知りの彼には色々なことを教わったわ。だから何度も美術館や音楽会にご一緒しました。でもその時私にはもう婚約者がいたから、恋とか愛とかには至らず、唯それだけのお付き合いで終わってしまったの。」

あの方、今は、どうなさっているかしらね」

そう言いながら打ち萎れたように、婆々ちゃんは居眠りを始めた。昔の色んなことを一挙に思い出して、どっと疲れが出たようだ。

祖母をそのままソファに寝かして、省吾と流音は、もう一度アルバムを開いて見た。

翌朝、流音は「九谷セラミック・ラボラトリー・オープン！」の記事を目にした。

小松市のホームページを見ると、SNS映えるユニークな建物が、幾つもあった。

九谷焼の創作工房というセラボは、隈研吾氏設計のユニバーサル・デザインだという。

コンクリがむき出しの本陣美術館は、黒田紀章の設計で、ギャラリーの空間利用が奇抜だそうだ。そして元倉真琴と伊藤麻理共同設計のサイエンスヒルズ（科学館）は、実に、斬新極まりない隆起広場の低層建築である。

それに白壁土蔵を改造したおしゃれな宮本三郎館や幾つかの九谷焼展示館等々がある。

序でに「洒落た喫茶店は？」と検索を続けて、何と「流音」という喫茶店を発見した。

興味津々の流音は、早速小松へ車を走らせたが、先にその喫茶店に寄ることにした。

軽四でも四十分足らずで、小松に着いた。

市街を迂回して産業道路を進み、東山のインターを降りて山手に向かう。更に大杉方面への道なりを数分進むと、その店があった。

意外と小さい店だが、オーナーの作品を展示するギャラリーを兼ね、隣に工房まで備わっていて制作現場も無料公開しているという。

流音は、何よりも店のママが、余りにも祖母に似てたので、息を呑むほど驚いた。

まず「田原流音です」と名乗って、単刀直入に、店の名前「ルネ」の由来を聞いた。

「家の裏に川が流れていた。唯それだけの単純な発想で、意味なんて何もないのです」

「私は、名前負けしてるって言われますよ」

「失礼な！ こんな綺麗でいらつしやるのに」

他に客もいないこともあって流音は、ママとは旧知の間柄のように、話ができた。

「小松には著名な建築家の作品が、結構ありますね。全部見て回るの、とても今日は無理ですから、あらためて出直します。その時は、お婆様を連れてきます。驚いたことに、私のお婆様、実にママそっくりなんです！」

「それは楽しみだわ。是非、ご一緒に」

流音は、ギャラリーの中に、ペットを吹く男を描いたマグカップを見出した。

「変わったデザインで、いいですね」

「そう、旦那はトランペットを吹く変なナルシストなんで、自分がモデルなの」と照れ笑いをし「彼は今も制作中ですから、隣の工房を、どうぞ覗いてみて下さい」と言った。

とその時、スマホの着信音が鳴り響いた。

即座に流音は、トートバッグを逆さにして何か探し物を始めた。挨拶もそこそこに店を飛び出し、さっと帰って行ってしまった。後には、一冊の文庫本が残されていた。

それに気づいたママは、すぐ追いかけたのだが、もう車の影はなかった。

ゴールズワージーの「林檎の樹」というその本は、赤茶けてかなり古いようだ。それを拾い上げた時、紙切れが一枚、零れ落ちた。

手製の栞のようで、不思議な絵柄である。

薬師は、有名なシャガールの絵だと言ったが、ママはそんな画家なんて知らなかった。

妙な絵のことよりもむしろ「with M・M」という文字に、好奇心が騒ぎ、見知らぬ若い二人のドラマを妄想したりした。

だが流音からは、一か月も音沙汰がない。

それでもママは流音の再来を信じ、自分に似たお婆様にも、必ず会える気がしていた。

半券をカウンター越しの壁に貼り、その下に文庫本を並べて、待つことにした。

時々、お客さんと余計な話をする。

「これらはお客様の忘れ物なんです。」

それも、五十年の時を経た代物で、意味深なサインまであるのですよ。

何か、時空を超えた浪漫を感じませんか？」

(三)

雅彦が「妻の様子がおかしい」と気付いたのは、母が死んで半年も経った頃であった。

物忘れや約束の反故、頻繁な紛失はまだしも、近頃では、同じことを繰り返し、買物しても、要らないものを、山程買ってくる。

その内、新聞や本を読まなくなり、テレビドラマの筋も追えなくなる。小銭の計算もできず、料理の味付けも可笑しくなりだした。

雅彦は、日毎に神経が蝕まれていく妻を、黙って見守るしかなかった。

一年後、最早、認知症の症状は悪くなるばかりで、やむなく特別養護老人ホームに入れることにした。だが、恐怖に怯えて混乱し、度々大騒ぎを引き起こすことがあった。

そして遂に、壊れてしまう日が来た。

「さつきからじつと見とるけど、あんたは誰や？」と怪訝な表情を崩そうとしない。

雅彦は、老人性痴呆であった母親の狂乱を見ていたから、まだ若い妻の頭が侵されていくのは、見るに忍び難かった。

食べ物や飲み物をこぼす始末や尿漏れの処理なんかは、まだ堪えることが出来た。

だが、まるで他人のように、追い払われた時は、流石に穏やかではいらなかった。

そして看護師を泥棒呼ばわりした時、遂に大声で諫めてしまった。

ところが道子は、その怒鳴り声をぶち返すように手をあげて向かってきた。そして力尽き、睨むだけの恨めしい顔をした。

そんな道子を見た雅彦は、そっと背を向け不甲斐なくも泣いてしまった。同じことがあったと、親不孝した母親を思いだしたのだ。

いつの日か、やたら嫁を悪く言う母に「そりや違ふやろ！」と声を荒げた事があった。

すると母は、怯えて今にも泣きそうな顔で雅彦を睨み返した。それが、壊れる前に、母が雅彦に見せた、最後の意思表示であった。

母はそれから直ぐに、介護認定を得て特養老人ホームに入った。半年後には、あつけなく、天寿を全うして逝ってしまった。

母の訃報を聞いた雅彦は、ずっと疎遠であったことを悔やんで泣いたが、妻や子供達に涙はなかった。自分一人が悲しみに暮れた。

葬儀は、魚津の生家で執りおこなった。

おくりびとの一挙一動を見守っていた妻が死化粧をした姑の頬に手を当てて泣いていた。

それを見て雅彦はホッとしたものだった。

雅彦も、とうとう古希を迎えた。

秋の夜長、ふと気がつくといつも傍らにいた妻がいない。やたら寂しくて人が恋しい。

自分の独り言に驚くこともよくある。

そこで、陶芸サークルに入ることにした。

七十の手習いだが、週二回の土練りやろくろ体験は、性に合っ

たのか、夢中になれた。

その仲間達との花見や食事会も愉しんだ。

大杉の城山に登った時だった。

帰途、オーナーと懇意だと言う仲間の案内で、山あい的小洒落た喫茶店に立ち寄った。

雅彦は、その店に入るなり、正面の壁に貼られた一枚の葉に釘付けになった。

見た覚えのあるシャガール展のチケットのコピーである。それにカウンターには、懐かしい文庫本「林檎の樹」があった。

「もしや」と裏表紙を見て、声を失くした。

はつきりと「松田」のサインがある。この青インクの太文字は、自分が書いた万年筆・モンブランの筆跡に間違いない。しかもこれは、シャガールと一緒に観た宮岡響子と言う女性に、自分が贈った新潮文庫そのものだ。

「こんなものが、なぜ此処にあるのだ？」

驚く雅彦は、更に度肝を抜かれる。

何とあの村岡光子が、忽然と現れたのだ。

「今の光子は喫茶店のママだよ」と矢野が言っていたことを思い出し、合点した。

光子の顔は、前にTVで見ていたが、直に対面するのは、実に四十数年ぶりであった。

雅彦と光子は、言葉もなく、凍りついた。

重苦しい二人の様子に、気を利かした仲間は、それぞれ、隣の工房に退散して行った。

青春の頃、あの宮岡響子に似ていた少女に夢中になった。だが仕事を優先し、恋を捨てた。その罪悪感の残る人間との再会である。

混乱し、うろたえる雅彦に対し、光子は冷静を装って、泰然としている。

「貴方はお変わりなく。私も、色々ありましたけど、この通り元氣々々です。」

来春、とうとうお婆ちゃんになります」
嫌な過去等忘れましてと言う顔である。

光子は、ことの顛末を話し始めた。

「その本は、先月、うちの店と同じ名前のルネというお嬢さんが置き忘れていったもののなの。すごく綺麗で、誠実さと品性を備えた今時珍しい娘さんで、つい嬉しくって、色んなことを話しました。」

彼女も、富山県の魚津生まれだって言ってたけど、まさか貴方の娘さんでは……？」

「滅多なことを言ってくれるな！」

雅彦は、何故かムキになって声を荒げた。

その娘は、あの宮岡響子の孫では？！

「そっいえば、あの本には『松田』って書いてありましたが、貴方のものですか？」

雅彦はうつかり、うんと頷いてしまった。

昔、松田がこの本を流音の祖母に贈った。

それを今、流音が読んでいる。

その祖母がなぜか、自分とそっくりだ。

そんな推理を巡らした光子が、口走った。

「この葉と本は、あなたの過去を知ってる」

雅彦は、光子の鋭い推理が怖くなった。

このまま話を続けると、過去の諸々が見透かされそうで、黙って帰ることにした。

有為転変の人生を送った筈の光子だが、今はファミリーな幸せの、ど真ん中にいる。

ならば、もう「彼女への罪悪感の呪縛からは解放されている」と自分に言い聞かせた。

深酔いのうつろいの中、光子とのが静かにフェードアウトしていくのを見送った。

(四)

雅彦の元に、市役所から胸部X線の判定通知が届いたのは、それから数日の後だった。

雅彦の喫煙歴は五十年になるし、今もひと箱は吸っているのだから、いつ「要検査」から「要医療」になるかと恐れてはいた。

特に今年の夏は、体重が減り、咳や痰がやたら多くなって「ゼーゼー」「ヒューヒュー」という音が鳴った。喘鳴という症状らしく、いつになく、検査結果を心配していた。

案じた通り通知は「要医療」だった。

満を持して、金沢の大病院で診察することにした。そこで遭遇したのが、因果なことに田原省吾という医師であった。

まず、CT検査をし、肺機能検査（スパイロメトリー）もした。

すると一秒間に吐ける息の両が、七十%より低いという数値が出て「症状は軽くないから即刻、禁煙！」を申し渡された。嫌われ、疎まれても辞めなかった喫煙を、今度こそ止めなければならぬ。

「本当に重症化すると、鼻にチューブを装着して酸素ボンベか

ら酸素を吸入する在宅酸素療法をしなければなりません。ですが、今のところ、そこまで深刻ではありません。」

医師は、あくまでも優しい語り口であったが、次にはさらっと残酷な言葉を口にした。

「治療は進行を遅らせ、症状を緩和するだけで、破壊された細胞は元には戻りません」

「即刻、禁煙に徹し、抗炎症薬の投与に掛かり、併せて吸入リハビリをして呼吸機能を回復させましょう」とフォロワーした。

口すぼめ呼吸や腹式呼吸を朝夕の運動として続けてみよう、と、素直に思った。

一段落して、田原はおもむろに

「松田雅彦さんは、もしかして私と同じ魚津のお生まれでは？」と問いかけてきた。

「そうです。何故、お分かりでしょう？」

「ぶしつけですが。宮岡響子という女性を御存じですね。実は私、その息子なのです」

雅彦は、哑然となった。

この前、光子と再会したばかりで、今、響子の息子田原省吾と対面している。

この運命的な遭遇に、言葉もなかった。

宮岡響子が、あの地元で有名な田原医院に嫁いでいたとは、全く知らないことだった。

そうになると、あの響子の孫の流音は、田原省吾の娘ということになる。

雅彦は今一度、母親に似た端正な田原省吾を見つめながら、神妙に話の続きを聞いた。

私は今、妻と娘の三人で金沢に住んでますが、生まれも育ちも貴方と同じ、魚津です。

そう、実家は、御存じの田原医院です。

この春、その実家で私と娘は、一緒に母の手製アルバムを見せて貰いました。

写真のないアルバムですが、殆どのチケットにはM・Mというサインがありました。

それを根掘り葉掘り、追及しましたところ、根負けした母は、本音を吐きました。

「本当の別れは、忘れてしまうことです」

会えなくても、大事な人をずっと記憶しておく為に、書いたサインだと言いました。

「この方と一緒になっていたら、あなたも流音もこの世にいないことになる。それも不幸だね」とまで言ったものです。

娘と二人、それは「恋」だと思いました。

母はフルネームまで明かさなかったが、高校の二つ先輩だと漏らしました。幸いにも私をはじめ母も娘もそれに妻まで皆、地元の高校出身でしたので、家には分厚い同窓会名簿がありました。卒業年度が分かれば、M・Mを探すことなど、いとも簡単な事でした。

「M・Mは松田雅彦ですね？」と言うと、母は驚きながらも、素直に認めたものです。

その時から私は、松田雅彦なる人物に是非会ってみたいと思っていました。

「今、そのご本人を、私の患者としてお迎えしたのです。まさかの遭遇にびっくりです。」

よろしければ、いずれ改めてお話を……」

ふたりは、一週間後に、日航ホテルのラウンジで会う約束をした。

その日、雅彦は、カジュアルに、煤竹色のローゲージ・ニットをざっくり着込んだ。

田原の方は、濃紺のジャケットとパンツのセットアップで薄いピンクのTシャツを合わせたフオーマルなスタイルである。そして紫の煙をくゆらせ、カウンターで待っていた。

雅彦は「禁煙を命じた本人が！」と思いつつ、カッコよく決め込んだ男に気後れした。

その上「ご足労かけて申し訳ありません」と鄭重に挨拶されて、恐縮の度もあがった。

「私は医師を目指しながら学生の中から文学に興味があつて、同人誌に足をつ込んでいました。これが、その同人誌『握友』です」

田原は、そう言つて小冊子を差し出した。

「今回、以前から母に聞いていた話を膨らませ、ちやちな推理小説を創作してみました。勿論フィクションですが、モデルとして貴方と母を拝借しました。その無礼をお詫びしたかったのです。どうぞお許しください」

田原は、直立不動で雅彦に頭を下げた。

「ちなみに、母の響子はい先日この世を去りました。交通事故故による外傷性骨折と多発性脳出血で、一カ月余の闘病生活でしたが」

「響子が死んだ！ もう二度と会えない」

雅彦は、強い衝撃で茫然自失となった。

その夜、一連のつながりを思い巡らした。

流音は、お婆様の事故の知らせに驚き、店を飛び出し、文庫本

を置き忘れていった。

引き取りに来れなかったのは、お婆様が重篤だったから。そしてお婆様は亡くなった。

しかも、そのお婆様は、宮岡響子だった。四十九日を終えたら、流音は必ず現れる。

その時光子は、事の仔細を流音から聞き出し、自分との関わりも流音に話すであろう。

純粹な流音が抱いているM・Mのイメージは、決して壊してはならない気がする。

真実を知らない方が、幸せなこともある。だから雅彦は、自分がM・Mだと言って、彼女の前に顔を出すのは止めようと思った。

(五)

そもそも前園宗之と蓮池陽子の出会いは、上京の夜行列車での相席であった。

ふたりは、同じ高校の先輩、後輩だったが、会話を交わすのは初めてだった。

偶々学生寮の友がくれたチケットがあったので観劇に誘った。それは東大のギリシャ悲劇「トロイアの女」で、夜の日比谷野外劇場のその舞台は、余りに刺激的であった。

その流れで、上野の国立西洋美術館の「シャガール展」鑑賞を、二度目の約束とした。

鮮やかな色合いと不思議なドラマ性のあるユニークな絵に、二人とも魅了された。

しかもそのチケットの絵も衝撃的である。

薄桃色の女性が橙色の馬面に頬を寄せる大胆なツーショットのカット絵であった。

実際には、タイトルも「真夏の夜の夢」と言う不思議な絵であった。右手に赤子を抱く母親が、青一色の闇に密かに潜んでいて、左上には羽を広げたオレンジ色の天使と思しき女性が、口を開けて宙に浮いている。

陽子を夢中にさせたのは「これぞシャガールの主張」と語る宗之の熱弁だった。

ある梅雨空の日に、深大寺へと出かけた。

小雨に濡れながら開山堂、釈迦堂や鐘楼を巡り、深沙堂への参道を歩いていた時、雨脚が急にひどくなった。慌てて雨を凌ぐ軒先に身を寄せて、言葉もなく雨上がりを待った。

突然、寒さに震え出した陽子を引き寄せて、宗之は、思わず陽子の唇を塞いだ。

唇が重なったのは、ほんの一瞬だった。

その時陽子は、二人で見た映画「シベールの日曜日」の幻想的な場面を思い起こした。

戦傷による記憶喪失の男と天涯孤独の少女の、儚く切ない逢瀬を描いた仏映画だった。

『ある夜、あなたはキスしたわ。なぜだかわかる？ 青い石が転がって、唇のように、私の目に触ったの。そう、波紋の中、ここが、私たちの世界よ』あの少女の独白が聞えた。

とろけるような眩暈を感じて、陽子は宗之の胸にすがった。伝わってくる温もりのまま、じっとしていたい気持ちだった。

電話のない二人は、いつも別れ際に指切りをして、次の約束を確かめていた。

ところが、何故かその日、約束の指切りもせずに別れてしまっ

た。それが予兆であつたかのように、陽子からの連絡が途絶えた。

その日を限りに、全く梨の礫であつた。

宗之は「あの接吻に及んだ行為が悪かつたのか」と、悶々とした日を送った。

夢うつつに、美しい陽子の顔が浮かんだ。

知的で意志的な、水平に真っ直ぐな眉。

繊細で優しい、ぼつちりした二重の目。

ずっと鼻筋が通る、彫りの深い顔立ち。

藤田嗣治の絵みtainな乳白色の透明な肌。

写真はなくても、面影は鮮明に浮かんだ。

宗之は、熱い告白の手紙を書いたが、返事は貰えなかった。最早、諦めるしかない。

そして、この恋は終わった。(第一章)

田原省吾が書いたのは、七章にわたる長篇だつた。その物語は、タイトルの「with M・M」がキーワードとなる推理小説である。

作者は、小説の魔術で読み手を惑わす術を知っていた。だから雅彦は、第一章を読むうちに落ち着きを失くし、慌てることになる。

まず、自分と宮岡響子のアリバイを目撃証言しているような設定に驚いた。事実を化粧し、膨張させて、小説の妙が生きていた。

蓮池陽子は宮岡響子そのものだが、知性やセンスある前園宗之は、自分とは大違いだ。

現に、自分は自信が無く、告白の手紙すら書けなかった。まして深大寺のような恋物語は、したくても出来ないシナリオである。

学生の自分は、夢心地で響子に会つてはいたが、恋する気持ち

に気付かずにはいた。

連絡が途絶えた時も、寂しいとは思っても恋しくて悶々と悩むことはなかった。つまりは、単純に美しい女性に憧れただけだった。

例の文庫本を見たり、その息子に会つたりして宮岡響子を追想したが、恋に臆病な雅彦は、直ぐ、現実に戻されて夢も醒めた。

雅彦は、感動した映画は、エンドロールを見届けて漸く「完結！」とする主義である。

だから今、村野光子のことも宮岡響子のことも皆、一部始終を思い出しながら「完」の文字を見届けることにした。ふたりのことは、もう二度と反芻しないと固く心に決めた。

エンドロールのBGMだけが耳に残った。

今、雅彦の妻は、闇の病を彷徨っている。

よく、夫婦関係を空気のような存在と言うが、互いに息遣いの熱さや匂いを感じなくなると、息は苦しく、自然な呼吸ができなくなるものである。それでも、男というものは、とかくその不協和音に気がつかないでいる。

雅彦も、何事もなく平穏だから、わが家は円満だと思い込んで、何となく生きてきた。

妻を裏切る勇気もなかったが、積極的に心から愛したという実感もなかった。

もしかして、妻が姑への反目を通したのは歓迎されない嫁の抵抗ではなく、心から愛をくれない夫への面当てだったのかもしれない。

カーテンに縋るように、窓の外を見ていた道子を、雅彦は後ろ

から静かに抱いてみた。

一瞬「うつ」という声を漏らした道子は、雅彦に体を預けるように傾け、目を閉じた。

陽の明るいうち、立ったまま道子を抱きしめることなんて、思えば、初めてである。

雅彦の胸は、ときめくように高鳴った。

先刻までいぶかしげな顔をしていた道子の顔が、静かな笑みで膨らんでいく。

夫だと分からなくても、気持ち伝わらなくても、こうしてやるだけでいいのだ。

目をみつめ、自分を余り主張しなかった道子の「生きがいは何であつたのだろうか」と聞いてみた。勿論、答えがある筈がない。

だが「母であり妻であつた」と言わんばかりに唇を噛んで、紅潮する道子の顔を見た。

「不甲斐ない旦那で悪かつたな」

そして雅彦は、その道子と並んで、慣れないスマホの自撮りをしてみた。

自信がないから、何枚も撮ってみた。

心虚ろな童女と禿頭の髭仙人というツーショットは、おかしな組み合わせだったが、それをタブロイド判に拡大コピーしてみた。

雅彦は、捨てずにいたモンブランの万年筆とインク瓶を取り出しにかかった。

朝早く、その写真に、雅彦と道子の頭文字を並べて「with M & M」と書いた。